



令和 8 年度 音楽科実践・研究計画

部 員 ○大山光子 奥田瑞季

I 音楽科における 自律した学習者の姿

- 1 「音楽のもと」に目を向けながら、自らの音楽表現をよりよいものにしようとする姿。
- 2 感受と知覚の両方を働かせ、思いをもって音楽と関わり、仲間と表現することで、人とのつながりを大切に作る姿。

II 音楽科における 授業デザインの取組

- A よりよい音楽表現を目指し、表現力の向上につながるように、協働学習の中でモデリングによる学びの導入。
- B 根拠をもって互いの音楽表現のよさを認め合うことができるように、「演奏者」「聴き手」になり助言し合える場の設定。

III 1・2 年次研究で生成した仮説

	問題解決に没頭する子どもの姿 (数字は、自律した学習者との関連)	要因・手立て (英字は、授業デザインの取組との関連)
一 年 次	強弱や音の重なり、反復と変化といった音楽の特徴に着目しながら、自分たちの思いを重ねて表現しようとする姿。(1、2)	中学生のゲストティーチャーの範唱を聴いたり、助言を貰ったりして、自分たちが目指す表現の方向性を自覚し、学習課題に向かえるようにした。(A、B)
	太鼓の音色やリズムのつなげ方に着目しながら、自分たちの思いに合った表現を生み出そうとする姿。(1、2)	鑑賞や中間発表で学んだことを生かして、「友達と一緒にまつりの音楽をつくってみたい」という意欲を高め、気付いたことを引き出して学習課題に向かえるように働きかけた。(A、B)
二 年 次		

IV 1 年次研究の課題と、改善するための手立て

	課題となった子どもの姿 (数字は、自律した学習者との関連)	改善するための手立て (英字は、授業デザインの取組との関連)
一 年 次	音楽的な気付きと自分の思いを十分に結び付けられず、表現の変容が起きにくかった姿。合唱ではパートの役割理解が不十分で歌い方に迷う姿が見られ、お祭りの音楽づくりでは拍の安定や工夫の方向性がつかみにくい姿。(1、2)	より深い表現につなげるために、基礎的な技能の定着を図る活動を取り入れる。(A、B)